

国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM



Contents

- 青少年国際理解セミナー講演録(1)…………… 2
- 「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議… 6
- SSEAYP International General Assembly(SIGA) in Vietnam… 8
- ターニングポイント……………10
- 日本青年国際交流機構平成17年度活動方針…13
- タイにおける既参加青年の事後活動……………14
- 愛・地球博で活躍する既参加青年……………15
- スペシャルオリンピックス冬季世界大会……………17
- ヤング・リーダーズ・フォーラム日本参加青年募集!…18

マクロコズム
2005.7 vol.65

(財)青少年国際交流推進センター

2005年3月13日(日)に、六本木ヒルズにおいて、前軍縮会議日本政府代表部特命全権大使である猪口邦子教授に講演をしていただきました。その講演録要旨の一部を抜粋してお届けします。



国際社会における 日本の役割について

上智大学法学部教授
猪口邦子氏

～今日の世界への認識～

今日の世界は、どういうところにあるのかと考えますと、歴史的には9.11以降の世界という定義になるでしょう。ちょっと大きなタイムスパンで考えてみますと、第二次世界大戦以降、東西対立、米ソ対立の冷戦からその終結という流れの中で、米ソは極端に過剰な核兵器を持つほどになってしまったのです。そういう状態で冷戦は終わったわけです。

冷戦期に核兵器は使われませんでした。第二次世界

大戦の終わりに、広島、長崎で使用されました。私の軍縮大使としての出発点は、その経験を抱く日本が核軍縮を進める立場にあったのは言うまでもないことです。冷戦が終わったからといって、必ずしも核軍縮が特段に進んだわけではなく、これを多国間で進めるという大きな課題があるのです。

冷戦はどうやって終わったのか考えますと、直接的には東ヨーロッパが民主化して解放され、ソ連邦が自らの手で総選挙を実行して独立共和国に分かれ、ロシア連邦などが誕生したということだと思います。ですから、最終的に冷戦が終結したのは、民主主義を重視する考え方が中心的になってきたからかもしれません。冷戦後の世界は、民主主義の価値がかなり中心的な役割を果たしていくようになったと考えます。ところがその後、色々な問題が出てくる。民主主義を広めようとする過程で戦争があるように、矛盾がたくさんあるわけです。非武装市民として亡くなる方がたくさん出ると、亡くなった人は、もはや民主主義を構成しませんから、民主主義を広めるという考え方の根本と、付帯被害が大きく出る戦争とは、相容れないと言えます。ですから、究極の目的は戦争を

猪口邦子氏の経歴

- 1975 上智大学卒業
- 1982 米国エール大学政治学博士号(Ph.D)取得
ハーバード大学国際問題研究所客員研究員
- 2002～04 軍縮会議日本政府代表部特命全権大使
- 2003 軍縮会議(ジュネーブ)議長、
国連第1回小型武器中間会議議長を務める
- 2004 上智大学法学部教授

主な公職として、
国連軍縮諮問委員会委員(ニューヨーク国連本部)、
民主化・選挙支援研究所執行理事(ストックホルム)、
ローマ・クラブ委員、
財団法人 青少年国際交流推進センター評議員等。

2003年エイボン女性大賞受賞。
趣味はピアノと読書。夢は戦争のない世界。

なくしていくことで、それをどのように実現できるかを皆で考えなければならない。

外交の重要性～戦争は外交の失敗の結果～

「戦争とは何ですか」「どうやって戦争がおこるのですか」それは、外交が失敗するからです。外交の失敗形態が戦争であり、議場の破綻形態が戦場です。ですから、外交を復活させ、外交によって平和的に物事を解決するという流れを強化していかなければならないのが今日の状態です。

1985年、ソ連邦にゴルバチョフ政権が誕生したときから、西側は交渉ができる相手がソ連側に誕生したと考え、冷戦終結へのシフトを切り始めます。このとき、西側ではレーガン政権で、共和党の2期目でした。さて、2期目の共和党がどのような政権になるかが、図らずも今日的な課題となっています。なぜかという、共和党の2期目の政権であるブッシュ政権が何をするかを私たちは見ていることになるからです。

レーガン政権の特徴は、1期目にはソ連を「悪の帝国」と呼ぶ非常に強硬な姿勢を示しましたが、2期目には、ヨーロッパにおいて冷戦をまさに終結させた政権として大転換します。やがて、ベルリンの壁の崩壊、両独統一があります。他方で、同時期にアジアにおいては天安門事件と民主化の挫折があり、レーガン政権はアジアにおける冷戦の終結を達成できずに退場します。そこで、今日のブッシュ政権が何をするかを予測するならば、レーガン政権がなしえなかったアジアにおける冷戦の終結だと言えるでしょう。この点において、ブッシュ大統領は自らの役割を歴史の中から引き出していることになると思います。

アジアからの主張

世界史におけるアジアの立場には非常につらいものがありまして、世界史の大きな展開は、常にヨーロッパで始まり、遅れてアジアに到達する。しかも、激化した形で到達するというのが繰り返し見られるパターンでした。帝国主義もそうでした。冷戦の始まりは、ヨーロッパで

はベルリンの壁の構築に始まり、アジアに遅れて到達し、朝鮮戦争やベトナム戦争などのように、激化して到達するわけです。そして今お話ししたように、終結はヨーロッパで幕を開けていくのです。しかし、アジアではいまだに冷戦終結の波が充分には到達していないわけで、北朝鮮問題、ロシアとの領土問題、あるいは日中のややギクシャクした状態など、いずれも冷戦の残滓を帯びる要素を含んでいるのです。

ですから、まずアジア観というのが必要で、このような不当な立場にアジアがおかれぬように努力しなければならない。つまり、冷戦はヨーロッパと同じテンポで終結してもらいたかったし、世界の中心国にこの認識をきちんと持ってもらうなければならない。ですから、外交努力とは、まずそういうことを知らしめ、認識させることから始まると思います。しかし、ヨーロッパ、アメリカの政治家たちが、そのようなアジア観を持つ余裕はないので、やはりアジアからの主張として、まず歴史認識をどう持つかを伝えていく必要があるでしょう。

このようにして、冷戦は80年代後半から90年代初期に終結したのですが、日本ではその頃、バブル経済期に入ったため、政治的な分析をせずに、経済中心の考え方でこの10年間を過ごしてしまいました。バブル経済、そしてその崩壊という低迷の10年といった認識しかないわけですが、世界史では冷戦終結期にあたります。しかし冷戦終結期の後の「ポスト冷戦期」を構築しようとする時間が突然中断される出来事がありました。

それはアメリカにおける2001年9月11日の同時多発テロの発生でした。それ以降、世界は「ポスト冷戦期」というよりも「ポスト9.11」の世界になりました。「ポスト9.11」には、テロとどう戦うか、テロをどう封じ込めるか、テロリストたちに非合法の兵器が渡るのをいかに阻止するかという課題が拡がっていった今日の状況があるのです。ですから、ポスト冷戦の時代を十分に構築しえないまま、「ポスト9.11」に入ったため、テロ対策は、非常に包括的、体系的である必要がありますが、ポスト冷戦期のテロ対策としてはちょっと不十分であるかもしれません。

戦争の終結を目指して～和解のプロセス～

今日の戦争を終わらせるためには、戦争の性格を分析しなければならないでしょう。今日の戦争の性格を考えますと、冷戦の終わりに分岐点を持ってこないと正確な違いが見えないのです。冷戦期までの戦争は、特定の政治目的や政治的な覇権、ヘゲモニーをめぐる戦いです。だから、目的がかなりはっきりしていて妥協の余地もある。政治エリートたちが、和平協定のようなものを結び、翌日から戦火は鳴り止みます。しかし、今日の戦争の特徴は、和平協定を政治家が結んでも、翌日から戦火が鳴り止まないのです。引き続き、戦時と同じような大量の非合法拡散した兵器による被害が発生するという状態で、戦争の終わりが明確ではないのです。

なぜか。それは戦争の性格が特定の政治目的や覇権などをめぐるものではなく、恨みに根ざしているからです。例えば、民族紛争、宗教対立などです。“deep-rooted conflict”「根の深い戦争」という概念です。政治的な対立も根が深いと言えるかもしれませんが、特定の政治目的という定義ではなく、深い恨みhatredによるものだから、根が深いわけですね。ですから、政治指導部で特定の妥協をして、協定に署名をしたとしても、社会各層に浸潤している憎悪の念は収まらないから、コミュニティレベルでの殺戮が繰り返される。それがアフガン、コソボ、ボスニア、ルワンダ、スーダンであり、イラクの姿なのです。

では、deep-rooted conflictを終わらせる方法を構築していかなければなりません。単に戦争が終わればいいというだけでは終わらないわけですから、内容を分析して、戦争を終わらせるにはどうしたらよいかを考える。社会各層に浸潤する憎悪の念をなんらかの形で緩和しなければならない。この過程を「和解のプロセス」と言います。

21世紀の国際政治のキーワードは、「和解」「和解のプロセス」です。この間、韓国の大統領が日本に対し謝罪要求したという報道が日本で非常に大きく取り上げられていましたね。あの文章全体を見ると、最後の部分では、

和解しなければならないというふうに書いてある。大統領が主張しているのは最後には和解しなければならないということなのですが、日本の報道は謝罪しなければならないというところばかり取り上げるわけだから、ちょっと行き違いもでてくる。和解は、今日の普遍的な国際社会の課題なのです。つまり、和解のプロセスを構築しない限り、戦争を終わらせることはできない。和平協定だけでは人々は銃を捨てない。非合法に拡散する兵器の規模は世界でも非常に大きいのです。

軍縮大使としての取組～結果を目指して～

私が軍縮大使として取り組んだ軍縮努力は、大きく2つのジャンルに分けることができます。大量破壊兵器と通常兵器です。通常兵器の中には、被害が現にでている主要なものとして、小型武器と対人地雷があります。小型武器とは、1人ないし小さなチームで操作できる戦争用の殺傷兵器で、肩に掛けて地对空ミサイルの機能を発揮できるマンパッズや、スティンガーミサイルが入ります。小型武器による年間の被害が50万人で、対人地雷による被害は、私が着任した時は2万5,000人でした。私はとにかく地雷除去の先頭に立ちました。

先頭に立つという時には、常に議長職を取るほうが有利なのです。みんなを率いていく立場になりますので。対人地雷についてはオタワ条約があり、条約体制の中に地雷除去常設委員会というものがあるのですが、私はこの議長職をアジアで初めて取りました。なんとしても取



りたかった。なぜかという、とにかく1人でも被害者を減らさなければならないからです。実務に就く時に最も重要なことは、結果を出すということです。筋を通すのも重要なのですが、筋は全部通したけれども、結果的に人は死に続けていますというのでは、大使をやっている意味がない。ですから、結果重視の時代なのです。今日の講演会も1つの企画として内閣府が実施されたのですが、ここも結果重視ですね。今日の講演の結果、皆さんがきちんと考える人になり、国際政治について何か深いものを持って帰っていただかないと、結果にならないので、皆さんお願いしますね。(笑)そしてチャンスがあれば、ひるまないでアクションを起こして欲しいと思うのです。

私は軍縮大使でしたから、武器による人間の悲劇を最小化することが仕事で、対人地雷の犠牲者が減らなければ、何の演説をしても何をやってもあまり意味がないと考えていました。結果に変化をもたらす、英語では“make a difference”と言いますが、“make a difference”するには、自分がリーダーシップをとる際にひるんではダメなのです。これからがんばろうと思う時には、打って出なければならないと決心しました。

シビアな世界認識の必要性

実際には地雷除去の作業はとても危険で、作業中の死亡も多い。ですから、どうやって世界の広い地雷原を全部除去できるか考えたとき、日本のハイテク技術を用いたロボットを遠隔操作して除去するのが一番安全で早く、1人でも多く被害者を減らせるのではないかと思いました。日本のビジネス界も含めて皆に考えてもらうためには、日本が外交で中心的な役割を果たしていくことが重要なのです。日本では基本的にこの流れができていて、地雷除去のロボットが作られるようになっていますが、任期を終えて去年の春、帰国した時、大きな違和感がありました。「ロボットやハイテク技術は何のために使われているか、何のための開発か」と尋ねますと、世界ではあまり聞かない言葉なのですが、「癒し系」という言葉が出てくる。



あり余るこのハイテク技術の使い方について、日本は世界認識が弱すぎると思いました。

世界では毎年2万5,000人もの人が死んでいて、地雷除去をすれば、その被害を減らすことができるのです。実は、私がこの常設委員会委員長を退任する時、年間の犠牲者が7,500人になりました。ゼロにすることはできなかったのですが、この数字は、激しい日本のキャンペーンの中で、各国が動いてくれたということも表わしています。でも、まだまだ不十分で、もっとロボットが世界展開されなければなりません。

次に、小型武器による被害者は年間50万人ですから、1日に1,400人。地雷よりはるかに規模が大きいのです。こうやって空調の効いている部屋で私たちが世界の問題を考えている間、何十人もが小型武器の非合法拡散で死んでいるわけですね。

世界は、待ったなしの状態にあるとの認識が、この六本木に集う私たちにはないのかもしれない。

先進国に技術が集中し、技術が集中する地域に住んでいる教育ある人々、関心の高い市民層が、基本的には不十分な世界認識しか持っていない。だから世界の問題は解決できない。

まずは、このメッセージを皆さんに伝え、皆さんから、シビアな世界認識を持っていただきたいのです。

(9月号に続く)

「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議

「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議（以下、既参加青年会議）は、2005年2月24日から3月8日まで開催されました。会議代表者はサイパンに集結し、陸地で1日会議を開催した後につぼん丸に乗船し、第17回「世界青年の船」事業の最終区間の運航と併行して会議の前半を行いました。会議の後半は東京において、日本人の実行委員とオブザーバーを含めた形で行われました。

<参加国>

オーストラリア、ブラジル、カナダ、コスタリカ、チリ、フィジー、メキシコ、ニュージーランド、ソロモン、トンガ、アメリカ合衆国、ベネズエラ、日本

*日本からは日本青年国際交流機構幹事、実行委員代表及び事務局スタッフが参加しました。

<主要な活動と成果>

会議代表者が最初に取り組んだ活動は、第17回「世界青年の船」事業の参加青年に対する事後活動連携強化プログラムでした。このプログラムにおいて、会議代表者は各国の事後活動組織の代表、そして既参加青年の代表として、現役の青年に対して下船後にどのような活動が期待されるかということについて、寸劇とパワーポイントのスライドショーを使って説明しました。各国で行っている事後活動の具体例を示すことで、これからの活動内容を参加青年に伝えることができました。国別に分かれて事後活動についての意見交換をする際にも、それぞれ担当国を持ってアドバイスをしました。このほか、評価会や修了式への列席など、乗船中の多くの時間を現役の青年と過ごすことで、事後活動組織の存在や活動について、青年たちは理解を深めました。

<各国の活動報告>

- SWY17の寄港地活動の受入れに事後活動組織が全面的に協力（オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、日本）
- スマトラ島沖地震・津波の被災者への募金活動（カナダ、メキシコ、アメリカ合衆国、日本）
- 国内の自然災害被災者や恵まれない人への募金活動や物資の寄付（コスタリカ、トンガ、アメリカ合衆国、日本）

- 日本大使館との連携強化（チリ、コスタリカ、フィジー、メキシコ、ニュージーランド、ソロモン、ベネズエラ）

- 孤児院の子供を対象とした活動（コスタリカ）

また、多くの事後活動組織が、参加青年の選考や事前研修に関与するようになってきました。

<会議の成果物>

「世界青年の船」事後活動組織（SWYAA）の規約を改訂し、新しい憲章（案）を作成。

「SWYAA設立のための手順（Steps to Establish SWYAA）」を作成。

この憲章（案）が東西地域の参加国を含む、ほかの関係国に承認され、正式な SWYAA 憲章となることによって、各国の SWYAA が今後目指すべき長期的ビジョンが見えてくることになるでしょう。

SWYAA 憲章（案）については、ホームページからも閲覧することができます。

(http://www.iyeo.or.jp/swyaa/SWYAA/SWYAA_Charter_3.8.2005.htm)



会議初日の様子：
船上での第17回「世界青年の船」事業参加者とのセッションに向けての準備

サイパン





内閣府政策統括官表敬訪問



IYEO事務局での
会議風景

東京



歓送会：
会議の成果を
パワーポイント
などを使って参
加者に発表した。

<事後活動プロジェクト>

「世界青年の船」事後活動組織として、世界に広がるネットワークを活用したプロジェクトの立ち上げへの関心が高まってきています。過去のプロジェクトを引き継ぎ、今後継続的に取り組むべき活動として挙げられたプロジェクトは以下のものです。

1. グローバル・フォト・コンテスト
2. SWYAAロゴコンテスト
3. プロモーション・キット作成
4. 「世界青年の船」記念日(SWY International Day)
5. ペンパル・プロジェクト
6. 各国同窓会、パートナーシップの構築

☆さらに「世界青年の船」事業事後活動に興味がある方は、ホームページをご覧ください。<http://www.swyaa.org>

にっぽん丸船上

既参加青年によって企画されたグローバル・フォト・コンテストの投票をSWY17参加青年に呼びかけた



SWY17参加青年とのセッション



月日	日程
2/24	会議代表者サイパン着
2/25	11:00-13:00 オリエンテーション、自己紹介
	13:30-17:00 【会議①】「世界青年の船」事業の改革に関する説明、事後活動セッションの準備、SWYAA規約について
2/26	午前 乗船準備
	午後 乗船/出港
2/27	午前 【会議②】事後活動連携強化プログラム
	午後 「世界青年の船」本体事業への参加(フェアウェル)
2/28	午前 「世界青年の船」本体事業への参加(修了式)
	午後 「世界青年の船」本体事業への参加(評価会)
3/ 1	午前 【会議③】「世界青年の船」事業に関する意見交換、内閣府訪問の準備
	午後 下船準備
3/ 2	横浜港入港
	午後 ホテルへ移動・チェックイン
3/ 3	午前 内閣府にて表敬訪問
	午後 内閣府担当者との懇談・各国活動報告 【会議④】「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議のあり方
3/ 4	09:30-12:30 【会議⑤】SWYAAの規約の見直し、共通プロジェクトについて
	14:30-17:30 【会議⑥】SWYAAの規約の見直し、共通プロジェクトについて
3/ 5	09:30-12:30 【会議⑦】事後活動プロジェクトの立案
3/ 6	09:30-12:30 【会議⑧】事後活動プロジェクトの立案
	14:30-17:00 【会議⑨】事後活動プロジェクトの立案
	19:00-21:00 内閣府主催 歓送会
3/ 7	11:00-16:00 【会議⑩】まとめ
3/ 8	会議参加者帰国

「東南アジア青年の船」事業アセアン各国事後活動組織と日本青年国際交流機構で組織しているSSEAYP Internationalの第17回総会が、初めてベトナムで開催され、156名の参加者を得て成功のうちに終了しました。ベトナム同窓会並びに御協力いただいたベトナム政府に深く感謝するとともに、参加者の声を皆さんにお届けして報告とさせていただきます。(IYEO事務局より)

SIGA 2005 in Vietnam

第20回「東南アジア青年の船」事業参加青年
第30回「東南アジア青年の船」事業ナショナル・リーダー
日本青年国際交流機構幹事

白鳥正信

4月30日～5月4日、SSEAYPインターナショナル第17回総会(SIGA)が、ベトナムのハノイとハロン湾で開催されました。ベトナムは、「東南アジア青年の船」事業に1996年から正式参加をしており、2001年に同窓会が設立されました。ベトナムでは今回が初めてのSIGA開催となりましたが、同窓会の熱い大歓迎に、ベトナム既参加青年たちの厚いネットワークを感じました。

総会の中で行われた分科会では、テーマの1つとして、昨年末に起きたスマトラ島沖大地震と津波を題材に、「緊急事態に対するSIの反応とネットワーク」について取り上げられました。ブーケット島パトンビーチで経営するホテルが津波の被害を受けたタイの既参加青年の報告を受け、緊急事態にSSEAYPインターナショナルは何ができるのか、活発な議論が交わされました。また、スマトラ島沖大地震と津波に対する募金に充てるため、各国から持ち寄った品を景品に「SIラッフル(くじ)」が売り出され、SIGAの期間中に、約US\$1,000の資金を集めることができました。

プログラムの後半に訪れた世界遺産ハロン湾は、「海の桂林」とも呼ばれ、大小数千の奇岩が林立する神秘的で美しい湾内のクルーズを楽しみました。船上でのゆったりとしたひと時は、にっぽん丸での記憶をよみがえらせたのでしょうか、参加者の皆が参加青年に戻って、フォトセッションや歌合戦に盛り上がりを見せました。

このSIGAは、SSEAYPインターナショナルに参加する各国の持ち回りで、毎年1回開催されていますが、各国同窓会の新旧メンバーが交友を深め、お互いの状況を学ぶ非常に



交流会にてよさこいソーランのパフォーマンスを行う日本人参加者(筆者中央)

世界遺産ハロン湾にてクルーズを楽しむ(筆者中央)



良い機会となっています。ただ、若手の参加が実際には少なく、今後の活動の充実のためにも、もっとたくさんの既参加青年が参加できる環境を作っていけたら良いと思います。一方で、今回のSIGAには、「世界青年の船」事業の既参加青年4名(日本から3名、カナダから1名)や、「日本・中国青年親善交流」事業の既参加青年も参加しており、SSEAYPインターナショナルのネットワークが、「東南アジア青年の船」事業の既参加青年だけにとどまらず広がっていく可能性も感じられました。

来年の第18回SIGAはブルネイ・ダルサラームで開催される予定です。ぜひ一人でも多くの皆さんと、SIGAでお会いしましょう!

SIGA日程表

日程	平成17年4月30日(土)～5月4日(祝)
場所	ベトナム(ハノイ、ハロン湾)
プログラム	Day 1 参加者到着 Day 2 開会式・総会・分科会・歓迎レセプション Day 3 ハロン湾(世界遺産)・交流会(ハロン湾宿泊) Day 4 ハノイ市内見学・ショッピング・閉会式・歡送会 Day 5 参加者帰国

“From Heart to Heart” ～ 160名のファミリーと会して

第8回「世界青年の船」事業参加青年
田中純子

長袖を羽織っていた東京から、夏が始まったという炎天のハノイへ飛び、4日間のSIGAに参加しました。開催前日の4月30日、サイゴン陥落30周年という記念すべき日に居合わせることができ、後半はハノイから150キロほど東のハロン湾という世界遺産を訪ね、また毎日好きなだけフォー（米麺）を食すという幸せな体験もしました。私のように「世界青年の船」事業の既参加青年も含め、総勢156名の大きな集まりとなりました。昨年度の「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業で知り合った懐かしい顔もあれば、日本人も含めて新たな出会いもありました。



日本人参加者ととも（筆者前列左から2番目）

SIGAの魅力は、「ファミリー」という言葉がふさわしい参加者の幅の広さですが、今回それを吸収できるプログラムが準備されていたと感じました。既参加青年の息子さんという中学生も参加しており、覚えてたの英語を一生懸命使って、折り紙交流をしていました。分科会も2グループのディスカッションのほかに、簡単な手工芸、ベトナム語レッスン、

地元のパフォーマーと共にバンブーダンスをするなど、楽しめる機会も作られていました。残念ながら、主催国以外からは20代（事業に参加したて）の参加者が少ないように見受け



クラブ活動（ベトナム語レッスン）

られました。世代交代の勉強がてら、若手がSIGAに参加できるよう、資金面で工夫できてもよいかと感じました。

面白かったのは、ハロン湾のホテルでブルネイ、マレーシア、シンガポールが3か国共同の文化紹介をしたことです。歌を1か国1曲ずつ披露したのですが、知っている部分は皆で口ずさむことで、準備の労力は3分の1に、インパクトは3倍になりました。「一緒だけどちがう」「ちがうけど一緒」という“二枚舌”を使った外交上手に感心しました。

今年のテーマは“From Heart to Heart”でしたが、ベトナム実行委員会の心のこもったおもてなしに感謝するとともに、これから何人と再会できるかが楽しみです。



閉会式にて Nguyen Thi Hoang Van 実行委員長から修了証を受け取る 渡辺内閣府参事官

奥野照義さん 第1回「青年の船」事業参加青年



奥野さんは、第1回「青年の船」事業(1968年)に参加後、第11回「青年の船」事業(1978年)班長、「日本青年海外派遣団」(オセアニア団/トンガ)(1989年)団長を務められ、現在は、トンガ王国観光省駐日代表として、様々な活動に携わっておられます。「青年の船」事業参加後の37年間、いかなる困難も「青年の船魂」で乗り切ってきたとおっしゃる奥野さんにお話をうかがいました。

—幼い頃に大変なご苦労をなさったそうですね。

はい、私は「人間開業当初」からドラマチックな人生を歩き始めたのですよ(笑)。

昭和18年(1943年)に東京の池袋で生まれましたが、そこで米軍の空襲に遭って5人の肉親(父・兄・姉)を失いました。だから私は父の顔も兄弟の顔も知りません。

足手まといになる下の子ども4人を

つれて母が一足先に岩手県の盛岡市郊外の村へ疎開し、父親たちは家の後始末をしてから追いかける手筈になっていたそうですが、その間にやられてしまったというわけです。

異郷の地で母は想像を絶する苦勞をしたと思います。国さえも「倒産」したのですから、それは悲惨な状態であったことは間違いありません。

しかし、当時2歳の私は小学校の4年生になるまで、わが家が「極貧」であることすらまったく気付かず、母の愛情をいっぱいを受けて、のびのび、心豊かに育てられました。本当に女性は偉大ですね。

そんな母も、何度か皆をつれて山奥に入り、死のうと試みたそうです。しかし、その都度、一番幼い私の顔を見つめて死を思いとどまったのだと、だいぶ後に聞きました。

そんな生活だったからこそ、人の優しさや、他人の痛みなども分かるようになったのだと思います。その意味で「逆境もまた最高の教育環境」ですね。

—第1回「青年の船」は「女を乗せない青年の船」と言われたそうですね。

「青年の船」の最大の危機は、実は晴海を出航する前にやって来たのですよ。まさか自分が参加できるなんて夢にも思っていませんでしたが、当時大変な社会問題になっていたの、否応なしに目に飛び込んできました。どの新聞のトップ記事も「女を乗せない青年の船!」でした。

これは現代では考えられないこと

ですが、「若い男女が船のような閉鎖的な世界で2か月も一緒に生活したのでは風紀を乱す恐れがある」などと強く反対する勢力があったのです。新聞記事はそれに対抗するためのキャンペーンでした。

この問題がマスコミを大いににぎわしたおかげで、この事業が広く世に知られることとなり、応募者が殺到したようです。当時の新聞に東京都の女性の競争率が150倍だと掲載されていたのを記憶しています。

—「青年の船」から得たものは何ですか。

第1回「青年の船」が出航したのは1968年1月19日のことでした。



第1回「青年の船」出航 旗手を務める奥野さん

奥野照義さんの経歴

- 1966年 水泳コーチで東南アジアを訪問
- 1968年 青年の船の会会長(初代)
- 1971年 総理府青少年問題審議会委員
- 1982年 日米青年国際交流
ハワイセミナー委員長
- 1984年 オペレーションローリー
日本委員会委員
(英国チャールズ皇太子提唱)
- 1994年 日本青年国際交流機構顧問
- 1997年 トンガ王国観光省駐日代表



トンガ王国の「テルヨシ君」(左端の赤ちゃん)

時まさに、「明治百年の幕開け」で、あたかも「歴史の檣舞台」に登場したような、そんな興奮を覚えた私たちでした。

「結団式」のあの緊張感や佐藤総理大臣から手渡された「団旗の重み」が、37年経過した今も私のこの手の中にしっかり残っています。

私にとって「青年の船」の53日間は、まさに新鮮な驚きの連続でした。なかでも、全国から集まった気概に満ちあふれた仲間たちとの出会いは、それまでの自分を根底から揺さぶるものでした。

違った個性、違った背景をもつ300余名の友と寝食をともにしつつ得た事柄は、私にとって外国を見た、外国を知ったこと以上に意味のある大きな収穫でした。

私はこの日々の中で、グローバルな物の見方や考え方を学びました。私の人間としての未熟さや、いろいろな意味での力不足もこの時痛感させられました。

そして、私にとってとりわけ大きな喜びは、「青年の船」で「大きな友情」を得たことです。真の友が、かけがえのない財産であるとするならば、財産づくりに恵まれるあれほ

どの環境はそうざらにはないでしょう。

ある国の新聞の第一面に「日本政府もたまには良いことをする」と大きく載っていました。「青年の船」は日本政府が世界に向けて放った「数少ないヒット」のひとつでしょう。大いに誇って良いと思います。

ある国の識者が「この26,000kmの旅は『万巻の書物に勝る教育』である」とおっしゃいましたが、それがまさに私の実感でした。私の人生における最高の「師匠」は、何といっても「青年の船」です。

いかなる困難も「青年の船魂」で克服

これは同期生同士でよく話すことですが、私は「青年の船」の1回生であることをとても誇りに思っています。

それで、困難にぶつかった時など、「オレは『青年の船』の1回生だ。だから絶対にできないはずがない！」と、決して逃げないで、37年間様々な困難を乗り越えてきました。

仕事の面でも同様です。私は台湾

に赴任して3年になりますが、台湾人や中国人をライバルにして商売をするのは本当にシンドイです。

でも、この3年間、私はお役所の「入札」で全勝しているのです。強敵を前にして戦略を練る際、「1回生の頭は帽子をかぶるためだけにあるはずはない！」と、真剣に考えて知恵を出すのです(笑)。ホントですよ。私が苦難や困難に直面しそれを克服する際、いつも「青年の船」がバックボーンとなるのです。

—第2のターニングポイントになったのは何でしたか。

「青少年問題審議会」という内閣総理大臣の諮問機関がありました。20人の委員の平均年齢が63歳。その顔ぶれは、元東京大学総長や新聞協会会長など各界の著名人ばかりでした。

佐藤総理大臣の強い意向だったようですが、その中に3人の青年が加わることになり、そのうちの1人が私で



バエア総理大臣、マサン大臣、武蔵丸(後列中央)とラグビーを観戦する奥野さん(1997年10月)

した。1970年、私が27歳の時でした。「青年の船の会」会長として全国を飛び回っていたので目立ったのかもしれないですね。

青天の霹靂とはまさにこのことです。この2年間は本当に死に物狂いでした。審議会で発言しようと思えば、事前に送られてくる分厚い会議資料をしっかりと勉強しておかなくてはなりません。私にとっては、用語1つとっても難解でした。これまでの人生の中でこの時ほど緊張して懸命に学んだことはないと思います。

私たちへの期待は若者の率直な気持ちを代弁することだと考えました。でも、私は若者すべてのことが分かるわけではない。だから、いろんな人と会って話をしましたよ。振り返ると、この体験が「青年の船」の体験とともに、私の人間性を磨く上で大きな転換点になったことは明らかです。

—トンガ王国との出会いは？

トンガ王国との出会いは、平成元年、「日本青年海外派遣団」（オセアニア団）の団長として訪問したことに始まります。それ以来今日まで絶えることなく、トンガの人々と熱い交流が続き、1997年にはトンガ政府観光省の駐日代表を仰せつかりました。

私はこれまで国の国際交流事業を始めとして、水泳コーチ・仕事・個人旅行などで37か国ほど訪ねていますが、私にとって最も心に残る国がトンガでした。トンガには息を飲むほど美しい自然と、心豊かな優しい美しいトンガ人がいるだけ。あとは何があるわけでもない。でも、なん

だかとてもほっとする国なのです。

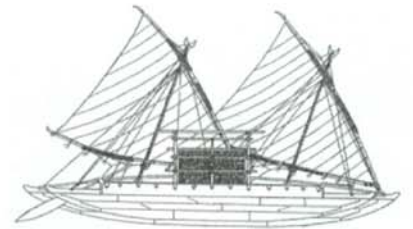
若者たちとも強い絆で結ばれています。見ず知らずの若者までが、お子さんに「テルヨシ」と私の名をつけてくれるのですよ。この7月に出産予定のご夫妻からはテルヨシではなく「オクノ」の予約が入っています。もっともこのご夫妻のお子さんは前回お嬢さんだったので「オクノ」の出番はなく、私の妻の「エイコ」（第1回「青年の船」団員）と命名されました。

—交流組織をつくられたそうですね。

はい、日本の「トンガ大好き人間」と在日トンガ人が大集合して1995年に「TSA（トゥイトゥイバオと桜の会）」*(注)という組織をつくりました。そのきっかけは在日トンガ人留学生を応援しようというものでした。

主な活動としては、広報誌「TSAの風」発行、トンガの文化やトンガ語の勉強会、トンガ料理のお食事会などです。

創設以来毎年、日本語学習において最も優秀なトンガの高校生に「TSA日本語賞」として賞金US1,000ドルを贈っています。これはトンガでは



古代トンガの伝統的なカヌー「カリヤ」

かなりの高額です。選考はトンガ政府の教育省に依頼しています。

私個人の活動としては、1996年以来、伝統文化の継承支援活動として、毎年行われるトンガの「伝統舞踊コンテスト(子どもの部)」の上位入賞者にTSA日本語賞に準じて、奨励賞を贈っています。また、トンガはラグビー王国ですから、ラグビーボールをトンガの全ての小中学校(143校)にプレゼントしました。

「愛・地球博」へ行けば、古代トンガの伝統的なカヌー「カリヤ」の復元されたものを見ることができます。私もこの建造にかかりました。1773年、トンガをはじめて訪れたキャプテン・クックが、その高度な技術に大変驚いたと伝えられています。

—トンガ語辞典をつくられたそうですね。

はい、トンガと日本両国の人々をつなぐ「8,000kmの友情の架け橋」の一助になればと願って、12年間かけて完成させました。「体験的『トンガ語会話』」というタイトルでA4判220ページ程のものです。「無料」のせいか、けっこう希望者が多かったのですよ(笑)。

—これからの計画は？

「企業秘密」なので、まだ公開はし

コラム 横綱武蔵丸はトンガ人！
武蔵丸をハワイアンだと思っている人がいますが、本名はフィアマル・ベニタニといい、トンガ人の父とサモア人の母の子で、サモア系トンガ人です。

コラム 皆知っているトンガ語？
「タブー」（語源はタブ）という言葉はトンガ語から来ています。

*(注) トゥイトゥイバオ：香り高い貴重な草花を十数種類組み合わせる「誇り高きトンガ王国を象徴する」伝統的なレイのこと。

日本青年国際交流機構平成17年度活動方針

ませんが、ありますよ（笑）。たとえば、トンガ国際空港から王宮まで千本の桜で「5kmの桜のトンネル」をつくる夢など「トンガ作戦」がいろいろ。

この3年間「中国語」に打ち込んできたので、一時中断していましたが、トンガ語会話の改訂版発行もぜひ実現したいと考えています。

—最後に、若者に贈る言葉を

よく中学校の卒業式などで述べてきた言葉があります。

それは「鳥は羽があるから飛ぶのではなく、飛ぼうとしたから羽が生えてきたのだ」と。ニュージーランドの国鳥キウイを見れば明らかですが、生物学という学問で証明されています。

そして、これは「釣り鐘論」とでも申しましょうか、釣り鐘は強く打てば大きな音が出るし、弱く打てば小さな音しか出ません。つまり、何をやるにも自分自身の取り組む姿勢が大切であって「すべて自己責任」だということです。

～インタビューを終えて～

「編集作業が楽になるように」と事前にメモを届けてくださった奥野さん。その細やかな配慮に大感激しましたし、奥野さんの優しいお人柄すべてが表れたような笑顔に魅了され、あっという間に3時間半がたっていました。

日本青年国際交流機構平成17年度活動方針 「共生社会の精神に基づく国際協調を目指して」

5月号に平成17年度の活動計画を掲載しましたが、今回は、活動方針について説明をいたします。

テロや地域紛争が絶えない厳しい国際社会の現状がありますが、青年国際交流事業の参加によって、人種や国籍、宗教を越えた相互理解の素晴らしさを体験した参加者による団体として、自らの役割を再認識したと考えます。

共に認め合い協力して社会を構成していくという精神を基本として、あらゆる立場の人々が平等に責任を果たしつつ連携していける社会の構築を目指して活動に取り組んでいくという考え方のもとに、今年度の活動方針を定めました。

① 相互理解を深めるための自己研鑽を図ろう

多くの人との出会いは、無限の可能性を与えてくれます。そうした出会いに応えるためには、自分自身を高める努力も必要です。

② 地域社会における国際交流活動を推進しよう

広く世界に目を向けつつ、自分の存在の基本である地域社会の向上を図ることを大切にしたいと

考えます。

③ 歴史ある国際交流団体として

社会貢献活動に取り組もう

国が行う青年国際交流事業の団体で、最も古い歴史を持つ立場として、積極的に時代のニーズにあった社会貢献活動を具体的に進めていこうではありませんか。

また、20周年を迎える本年を契機に、組織の充実を図るために財政基盤の確立を目指して、次の点に取り組みます。

「財政基盤の確立」

20周年を迎える本年を契機に、組織充実と活動の活性化を図るために財政基盤の確立を目指したく、その方策の一つとしてIYEO会員に対して寄附の呼びかけを行うことを、第41回全国推進会議で決定しました。この7月中に、会員の皆様に活動内容の説明と寄附のお願いを送らせていただきますので、御理解御協力のほどお願いします。

「フォー・ホープフル・チルドレン・プロジェクト (FHCP: For the Hopeful Children Project)」

事後活動の促進を目的とする、内閣府青年国際交流事業既参加青年事後活動活性化事業「東南アジア青年の船」事業既参加青年海外派遣の1つとして、タイ「東南アジア青年の船」事業事後活動組織 (ASSEAY) の活動調査のため、大河原友子副会長、白鳥正信幹事、本田温子事務局次長がタイに派遣されました。また一行は「フォー・ホープフル・チルドレン・プロジェクト (3月25日~28日)」にも参加。FHCPは「東南アジア青年の船」事業既参加青年、ASSEAY参与ビジット・デジウムトーン氏を中心に始められ、今年で15回目を迎えます。

SI(SSEAYPインターナショナル)事務局長
日本青年国際交流機構副会長
大河原友子

今回タイに行った目的はFHCPへの調査活動と、IYEO及び第17回「世界青年の船」事業参加者や「世界青年の船」メキシコ事後活動組織が集めたスマトラ沖地震による災害復興募金を持参することであった。募金先はタイ政府、プーケット地区に分け、政府の代表として受け取りにいられた総理大臣のスポークスマンMr.JakrapobとASSEAYの会長Mr.Chailにそれぞれ最良の方法で役立てていただくようお願いしてお渡しした。Mr.Jakrapobは第15回「東南アジア青年の船」事業の既参加青年で、私が管理部乗船した時の同期であり、17年ぶりの感動の再会となった。

FHCPは、子供たちに希望をもって生きていく力をつけさせ、一般の人々の理解を深めてもらうことを目的とし、政府や地元の人々、協賛企業など多くの人々の善意に支えられている。300名程の参加者のほとんどは身体障害児や



募金後に記念のサインをする大河原副会長

孤児。今年はそのうち100名ほどがプーケット地区の津波の被害児で、航空会社の協賛を得てFHCPに参加した。スタッフ約70名は全員がボラ

ンティアで、Mr.Visitをはじめ、ASSEAYメンバー、タイ・ユース・シップ・プログラム (タイ政府がASSEAYと協力して独自に実施) の既参加青年に加え、会場がラヨン海軍基地であったため、海軍兵士や地元の方々約100名がボランティアとしてサポートした。

子供たちは、自分はいろいろなことができるという自信、アクティビティを分かち合いながら得た友達やリーダーたちとの信頼関係、たくさんの人に守られているという安心感など身をもって体験したに違いない。このような経験がこれから力強く生きていかなければならない子供たちの人生にプラスの影響を与え、なかなか陽のあたらない状況におかれている彼らが、何かに目覚めるきっかけになることを願ってやまない。3泊4日という短い期間ではあったが、スタッフとして参加した我々にとっても、素晴らしい体験学習の場となった。この貴重な思い出を心の宝物としていつまでも大切にしたい。素晴らしい機会を与えられたことに心から感謝するとともに、何らかの形でこの経験をいかしていきたいと強く感じた。

日 程

3月25日	ラヨン海軍キャンプへ移動、FHCP準備、タイ南部の子供たち到着
3月26日	参加者到着、開会式、海軍兵士によるパフォーマンス、海水浴、参加団体の子供によるパフォーマンス、スタッフミーティング
3月27日	海軍ボート乗船、ボランティア活動、ゴミ拾い、海軍によるアドベンチャー・ステーション、グループ活動、海水浴、スポンサー宛御礼のはがき記入、子供グループによるパフォーマンス、スタッフミーティング
3月28日	閉会式、スタッフミーティング

愛・地球博で活躍する既参加青年

●アンデス共同館

2001年「国際青年育成交流」事業（メキシコ）参加青年
深作 阿里咲

当館では、ペルー・ポリビア・エクアドル・ベネズエラの美しい自然をご覧いただけるだけでなく、自然破壊に目を向けるコーナーもあります。アマゾンでは世界の酸素の30%を生み出していることをご存知ですか？またペルーはジャガイモの原産地でもあり、数百種類のジャガイモが生産されています。私たちの生活に実は深い関わりがある4か国。館長によるサルサセラビーなど様々なイベントが盛りだくさんの当館に、ラテンの陽気な雰囲気を味わいに来てください。



●ドミニカ館

2003年「国際青年育成交流」事業（ドミニカ共和国）参加青年
古布村 祐子

メレンゲが流れる国、ドミニカ共和国の人々と音楽に触れてもらおうと、企画したのが「メレンゲレッスン」です。2拍子リズムの簡単なステップで老若男女が楽しめます。もちろん、レッスン後も引き続きメレンゲを踊っていただいてOK。ドミニカ人スタッフとメレンゲを通して交流を深めてください。踊った人みんなが心から笑顔になれるメレンゲの体験にぜひドミニカ館へ遊びに来てください。

●ニュージーランド館

第17回「世界青年の船」事業
ニュージーランド参加青年
Melanee Beatson

テーマは“New”, “Sea”, “Land”, “People”。“New”は革新的な技術や前進的な考え方, “Sea”は南太平洋の美しい海に囲まれた島国, “Land”は息をのむような大自然を表します。呼び物は16歳の少女がNZ南島の川で発見した1.8トンもの世界最大級のポウナム（翡翠）の原石。ポウナムは先住民族マオリにとって神聖なもの。国外に持ち出せるのは珍しいのです。“People”は当館の特徴の一つ。来訪者はNZから来日した約40人とじかに交流できます。迫力あるカバハカ（マオリの伝統的な歌や踊り）のショーもあります！

●森の自然学校

第16回「世界青年の船」事業 参加青年
菊間 彰

知っていますか？愛知万博長久手会場の3分の1は森なのです。その豊かな森を丸ごとパビリオンにしてしまったのが「森の自然学校」。毎日30分おきに出発する森のツアーでは、たくさんの自然の不思議に出会えます。「もんごりなら」というナツの名前のどんぐり。ねこバスみたいなイモムシ。森には不思議がいっぱいです。あなたも「自然の叡智」を体験しに来ませんか？英語ツアーも1日に2回行っています。

東京都青年国際交流機構 会長

國分 由佳

東京都IYEOでは、4月24日(日)2002年度「日本・韓国青年親善交流」事業(招へい)参加青年の崔貞姫(チェチョンヒ)さんをお迎えして、韓国料理教室を開催しました。

30名が参加。「初めて出会った人と楽しく料理ができた」というアンケートの声も多く、共同作業は短時間でお互いの距離を縮めるようです。

韓国では料理の本でさえ、調味料の細かい分量は書いていないそうで、今回の料理レシピもほとんど、少々という表記。家庭料理ゆえ、家にある材料を使って、自分の舌を信じて作るのが一番のようです。

春雨のみならず、チヂミまでキッチンバサミで切ってしまう大胆さに驚き、油の温度を見るのに塩を入れる、こんなささいな発見にも文化の違いを感じました。

■ 作り方 ■

- ①韓国春雨をぬるま湯に1時間位入れ戻します。
- ②牛肉を千切りにし、㊸で味付けをします。
- ③しいたけ、ニンジン、たまねぎを千切りにします。
- ④お湯に塩を入れ、ほうれん草をさっとゆで冷水に取り、水気を搾り、5cmの長さに切ります。
- ⑤ニンジン、しいたけ、たまねぎをそれぞれ別々に塩少々を入れ、サラダ油でさっと炒めます。
- ⑥味付けしておいた牛肉を炒めます。
- ⑦卵をフライパンで薄くのぼして焼き、千切りにします。
- ⑧食べやすく切った春雨、野菜、牛肉を大きなボールに移し、しょうゆで色をつけます。
- ⑨砂糖、ゴマ、ゴマ油を入れ、塩で味付けをし、卵で飾り付けをして完成です。

잡 채: チャブチェ (韓国はるさめ)

■ 材 料

- ・韓国はるさめ/50g
 - ・ほうれん草/1束
 - ・ニンジン/1/2本
 - ・しいたけ/6枚
 - ・たまねぎ/1個
 - ・牛 肉/150g
 - ・卵 /2個
 - ・塩 /少々
 - ・ゴマ油/少々
 - ・サラダ油/少々
 - ・しょうゆ/少々
 - ・ゴ マ/少々
- ①
- ・しょうゆ/大さじ1/2
 - ・砂 糖/小さじ 1
 - ・ネ ギ/1本(みじん切り)
 - ・おろしにんにく/小さじ 1
 - ・しょうが
 - ・こしょう



ワンポイント

チャブチェは麺に、前もって炒め味をつけた具を順々にかからめ、あわせていくという調理法が本当の作り方。甘さをひかえて、あっさり仕上げます。チャブチェの麺は、サツマイモのデンプンが多く使われています。季節の旬の食材でお手軽においしく作りましょう。緑豆春雨(100g)でも代用可能です。



▲当日作った韓国菓子

◀韓国チヂミ

スペシャルオリンピックスをご存知ですか？

2002年「日本・韓国青年親善交流」事業参加青年
三澤 智恵

1963年、障害のある人たちの可能性を伸ばすには、スポーツの効果が大きいことを学んだ故ケネディ大統領の妹ユニス・ケネディ・シュライバー夫人が、自宅の庭を開放して開いたデイキャンプが、スペシャルオリンピックス（SO）の始まりです。

スペシャルオリンピックスの名称が複数形なのは、日常トレーニングや国際大会など、世界中でいつも活動が行われているからです。SOでは、参加する知的発達障害のある人をアスリートと呼びます。「SOが提供する継続的なスポーツ活動は、アスリートの健康や体力、スキルを向上させ、多くの人たちと交流することで社会性を育てます。適切な指導と励ましがあれば、アスリートは確実に上達し、自信と勇気を持って自立への意識を高め成長していきます」と言われています。

SOの競技会では、年齢、性別、競技能力の到達度に応じてクラス分けを行い、ほぼ同じ水準で競います。予選はクラス分けで、全員が決勝に進み、国や地域の競争ではなく、全員が表彰されます。

3年前、青年会議所の知り合いから「SO国内大会のトーチラン（聖火リレー）企画を手伝ってほしい」と言われ、初めてトーチランの存在を知りました。SOのトーチランとは、ひとりのアメリカの警察官がSOに対する協力・協賛を求めるといわれ、聖火を持ってトーチランを行ったのが始まりといわれ、今では、SOのシンボルとなり、全世界の警察官、消防官など公安業務に携わる公務員が中心となって活動しています。

2004年のSO国内大会トーチラン実行委員会のメンバーは、社会人、主婦、学生などボランティアで構成され、「シンプルでもハートフルに」と準備を進めました。大会直前は、仕事を終えてから朝方まで、土・日曜日にも準備しました。「距離にして約3キロ、時間にして3時間のトーチラン実施のためになぜこんなに苦むのか」と思うこともありました。

当日、トーチランナーのアスリート他、地元の警察、消防署員の方も伴走者として参加し、心配していた公道でのトーチランナーの誘導や、トーチの火が消えてしまうなどの問題もなく、



いづなりリゾートスキー場に集まった関係者

ゴール地点に入ってきた姿を見たときは、涙が込み上げてきました。帰り際に、男の子が「今日はありがとう。最後まで走れて嬉しかったよ」

と笑顔で抱きついてきました。アスリートと会うのはこの日が初めてで、「来年は一般ボランティアとしてアスリートと接したい」と思った瞬間でした。

2005年世界大会は私の住む長野県で86か国、地域から約2,700人のアスリート、コーチを迎えて開催されました。私はスノーボード競技会場の最初の入口で、入場規制をするゾーン係としてアスリートなどを出迎えていました。初日は緊張して笑顔で対応することができず、ヘッドコーチミーティングで「ボランティアに笑顔がなく、アスリートは怖がっている」と注意がありました。翌日の競技会場では、笑顔でアスリート、観客へ挨拶する姿が見られるようになりました。徐々にアスリートから話し掛けてくるようになり、ハンドタッチやハグなど戸惑うこともありましたが、信頼関係が築けた気がして、楽しく優しい気持ちになれた毎日でした。

SOに関わることで、社会人になってから意地を張って、自分を知らずに追い詰め、素直な気持ちを忘れていた自分に気づきました。アスリートは純真な心で、自分の可能性にチャレンジしています。周囲の助けを待つのではなく、自ら意思表示をし、ひたむきに努力する姿からは、日常生活で忘れかけていた大切なものを感じました。

今後は、知的発達障害の方が地域社会の中で、他の人々と交わりながら、あたりまえに生きることができるよう、地域の関心・意識を高める活動に参加していきたいと思えます。

ヤング・リーダーズ・フォーラム 日本参加青年募集!

I. 概要

1. 目的

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業によって招へいされる「世界青年の船」事業及び「東南アジア青年の船」事業の20か国の外国人既参加青年と共に、専門分野に分かれて討議を行い、それぞれの分野における各国の情報を交換すると共に、21世紀の各分野のあり方、青年リーダーとしての役割等を討議し、今後の活動に資すると共に、今後の活動に向けての具体的方策を見出すことを目的とする。

2. 主催

内閣府、(財)青少年国際交流推進センター

3. 日本青年の参加期間 (ヤング・リーダーズ・フォーラム)

平成17年10月8日(土)から同年10月11日(火)までの3泊4日間

4. 会場

独立行政法人 国立オリンピック記念青少年総合センター

5. 参加者

ア. 日本参加青年 20名

イ. 外国参加青年 20か国、40名

(ブルネイ・ダルサラーム国、カンボジア王国、インドネシア共和国、ラオス人民民主共和国、マレーシア、ミャンマー連邦、シンガポール共和国、フィリピン共和国、タイ王国、ベトナム社会主義共和国、バーレーン王国、コスタリカ共和国、エジプト・アラブ共和国、ギリシャ共和国、インド、メキシコ合衆国、ニュージーランド、ソロモン諸島、タンザニア連合共和国、アメリカ合衆国)

II. 募集について

1. 日本参加青年の資格要件

日本参加青年の資格要件は次のとおりとする

- ア 内閣府(総理府・総務庁)青年国際交流事業の既参加青年であること
- イ 25歳から39歳までの者であること(平成17年10月8日時点)
- ウ 英語による日常会話以上の能力を有する者であること
- エ 協調性に富み、事業の計画に従って規律ある団体行動ができる者であること
- オ 日本の社会(例、政治・行政・法曹、経済・商業、科学技術、医療、農業、マス・メディア、教育、社会活動、青少年活動など)で活躍しているリーダー層の青年であること、特に以下の2コースのいずれかを専門としているか、深く興味を持っていること
 - ① NPO マネジメント(組織の活性化)
 - ② 社会貢献活動(地域への貢献)

※ 事業全体のプログラムにおいて、この2分野をテーマとしたディスカッション・グループが設けられる予定。外国参加青年はテーマ別に各国1名ずつ供出し2つのグループを構成する。日本参加青年はヤング・リーダーズ・フォーラムで専攻テーマに応じてそれぞれのグループに所属する。

※ 日本参加青年募集人員数は約20名とする。

※ 再参加は妨げるものではないが、新しい参加者を優先する。

6. 日本参加者参加プログラム内容

月 日	日 程
10月7日(金)	招へい外国青年オリエンテーション、開会式(基調講演等)、歓迎レセプション ※ヤング・リーダーズ・フォーラムの日本参加青年は希望に応じて参加可(宿泊は実費を申し受けます)
10月8日(土) ～11日(火)	ヤング・リーダーズ・フォーラム ランチパーティー、ディスカッション、所外活動等、日本参加青年修了式

※ 「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業全体日程

10月6日 招へい青年到着/10月7日～12日 東京プログラム/10月13日～16日 地方プログラム/10月17日 会議準備

10月18日 グローバル・ユース・コンファレンス(成果発表会)/10月19日 招へい青年帰国

2. 日本参加青年として期待されている内容

- ア ヤング・リーダーズ・フォーラム選択コースのための準備
- イ ヤング・リーダーズ・フォーラム開催中の、日本代表としての積極的な発言
- ウ ヤング・リーダーズ・フォーラム運営のための協力と、外国参加青年へのフォローアップ
- エ コースで提言された活動に対するの事業終了後の実行協力

3. 参加費用

- (1) 内閣府の負担する経費
プログラム参加費、宿泊及び食事代（3泊4日）
- ※ 東京都23区在住（在勤及び在学も含む）以外の参加者については規定に基づいた旅費をお支払いします
- (2) 日本参加青年の負担する経費
期間中における疾病又は傷害の治療費用、旅行保険、小遣いその他の個人の用に必要な経費

4. 応募

- (1) 提出書類

- ① 申込書をダウンロードしていただくか、下記問合せ先よりお取り寄せ下さい
(http://www.iyeo.or.jp/Ren/2005/J/Form_JPY05.pdf)
- ② 作文（800～1,000字程度）
テーマ：「希望するコースで取り組みたいこと」
- (2) 募集締切り 平成17年8月8日（月）消印有効
- (3) 結果のお知らせ 平成17年8月中に御連絡します

5. 書類提出先及び問合せ先

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14
東京海苔会館6階（財）青少年国際交流推進センター
担当：大橋玲子、本田温子
Phone：03-3249-0767 / Fax：03-3639-2436
Email：ren@iyeo.or.jp
※封筒に「ヤング・リーダーズ・フォーラム応募用紙在中」と明記すること
本事業についてwebサイトで見る事ができます
<http://www.iyeo.or.jp/Ren/index.htm>

内閣府青年国際交流事業平成17年度地方プログラム日程

事業名	地方プログラム日程	受入自治体
国際青年育成交流<招へい>（第12回）	7月18日～25日	滋賀県、京都府、大阪府、鳥取県
21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい（第5回）	10月13日～16日	岩手県、福島県
日本・韓国青年親善交流（第19回）	11月6日～14日	北海道、岐阜県、徳島県
日本・中国青年親善交流（第27回）	11月15日～24日	山形県、京都府、和歌山県
東南アジア青年の船（第32回）	12月15日～18日	茨城県、新潟県、山梨県、愛知県、奈良県、島根県、長崎県、大分県、沖縄県、大阪市、北九州市
世界青年の船（第18回）	1月13日～15日	栃木県、福井県、長野県、広島県、高知県、福岡県
青年社会活動コアリーダー育成プログラム（第4回）	2月7日～12日	和歌山県、熊本県、宮崎県

—— 難民について知って欲しい ——

絵本「ほんのすこしの勇気から」 6月20日発売

平成15年「国際青年育成交流」事業(モロッコ)参加青年
放送作家 齋藤 圭子

このたび日本国連HCR協会監修で、難民についての絵本が出版されることになり、私が文章と絵を担当させていただきました。

「難民問題をどこか遠い国の出来事でなく、身近な問題として感じてもらえるような、わかりやすい絵本を作ろう。そして絵本の印税を難民支援のために寄付しよう」

この絵本は、ボランティア員の1人の、そんな呼びかけから始まりました。

その呼びかけに応じて、私を含む、職業も年齢もバラバラなボランティア員9人が集まり、みな本職のかたわら時間を捻出し、ミーティングを重ねました。

文章を書く人、資料を集める人、デザインをする人、発行してくれる出版社を探す人、みなそれぞれが、得意な分野で協力し合い、一冊の本を完成させました。

毎年6月20日は「世界難民の日」。今年のテーマは、「勇気」です。本作りについては素人ばかりの私たちのプロジェクトも、「本をつくりたい」、というほんの少しの勇気から始まりました。この絵本によって、人々が難民や平和について少しでも関心を持って、そして「ほんのすこしの勇気から」何かを始めるきっかけになればとても嬉しいです。

国際交流に想いのあるIYEOの皆さんにも、是非読んでいただきたいと思いました。全国の書店で扱っていただいています。是非手にとって読んでみてください。



🚢🚢🚢🚢🚢 グローバル・フォト・コンテスト 🚢🚢🚢🚢🚢

グローバル・フォト・コンテストは、平成16年3月に「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議で話し合われた“芸術イベント”を、日本の会議実行委員が中心となって具体化させたプロジェクトです。このプロジェクトは、「世界青年の船」事後活動組織 (SWYAA、日本を含む) の共通活動として実施され、日本青年国際交流機構 (IYEO) が広報及び写真の集約についての取りまとめを行いました。さらに今年度は日本青年国際交流機構設立20周年記念にあたるため、記念事業の一つとして位置づけられています。

コンテストでは、「食のある風景」をテーマとした写真を世界中から集め、応募作品の中から投票を行い、29作品が優秀作品とその他の優秀作品に選ばれました。また今年度はさらにこれらの写真をパネルにし、グローバル・フォト・キットとして

日本全国・世界各国で展示会や説明会を実施する予定です。第2弾のコンテストも企画中ですどうぞお楽しみに！今月号より優秀作品が表紙を飾ります。

第1回 Global Photo Contest 優秀作品

- 🏆 **最優秀賞**
「ツバルの海岸で」 齋藤 珠恵 (SWY10) (今月号の表紙写真)
- 🏆 **日本青年国際交流機構(IYEO)会長賞**
「タリの実を売る少年達」 岩崎 圭 (SWY11)
「無我夢中」 吉田 龍洋 (SSEAYP22)
- 🏆 **(財)青少年国際交流推進センター理事長賞**
「うれしはずかしバースデー」 山浦 和徳 (SWY16)

万博いきいき自転車の旅

第11回「青年の船」涉外 永松 三千生

日豪45名の高齢者自転車愛好家による約3週間の自転車の旅が終わりました。きっかけは「『愛・地球博』を記念して自転車で日本を走ろう」と言った91歳の自転車冒険家スタン・ジャクソンさん(豪)の一言。オーストラリア政府、万博協会の支援で、万博会場から広島まで10府県・40市町村を駆け抜けました。東京、京都、岡山の日本青年国際交流機構(IYEO)メンバーの協力で、さらに有意義な旅となりました。環境に優しい自転車が楽しく走ることができる社会の実現のためさらに努力していきます。



(詳しくはマクロコズム2004年11月号P.18-19を参照)

編集後記

マクロコズムの編集を通して、これまで見たことがなかったものを見て驚くのもひとつの楽しみです。P.15「愛・地球博で活躍する既参加青年」で紹介した「もんごりなら」「ねこバスみたいなイモムシ」をどうしても見たくて、写真を送っていただきました。皆様のご協力により、ひとつひとつの紙面ができていって行くのを見て喜んでいます。今後とも、皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。(ふ)



▲「ねこバスみたいなイモムシ」(シロシタホタルガ)

▲「もんごりなら」

航空機派遣OBのためのメールによる情報発信を開始します！

●詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.iyeo.or.jp/Air/airnet>

E-mail:airnet@iyeo.or.jp

TEL:03-3249-0767

日本青年国際交流機構(IYEO)

担当:赤澤・藤本



お詫びと訂正

マクロコズム2005年5月号(Vol.64) P.20「平成17年度青少年国際交流を考える集い(ブロック大会)一覧」の近畿ブロックでの開催日に誤りがありました。正しくは8月20、21日です。お詫びして訂正します。

MACROCOSM 7月号 Vol.65

2005年7月1日発行(隔月発行)

編集 マクロコズム編集委員会

発行 財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋

人形町2-35-14 東京海苔会館6階

TEL 03-3249-0767 FAX 03-3639-2436

e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp

URL: <http://www.centerye.org>

(CENTERYE)

<http://www.iyeo.or.jp> (IYEO)

編集協力 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)

日本青年国際交流機構(IYEO)

定価 198円(本体189円)

印刷所 柏木印刷株式会社

TEL:03-5395-3954

につぼん丸を陰で支える黒子として、
見えない安心感をお届けしたいのです。

につぼん丸通信士 福島 剛



since
1884
Pioneer Of
Cruise



USPH←米国公衆衛生局は米国に入港する客船に対して毎年検査打ちで衛生検査を実施しています。にっぽん丸は、2000年から3回連続して100点満点中99点を取るなど、日本船では最高の評価を5年半の間受け続けています。



冒険する生活
にっぽん丸

双眼鏡を覗いても島影ひとつ見えない大海原。とりもなおさず船旅の魅力とは、日常からのエスケイプ。携帯電話やインターネットを忘れて、海という大自然に身をゆだねることにある。「その通りだと思います。日ごろ私たちの生活は、あまりにも多くの情報に縛られていますからね。しかし、身のまわりから一切の情報がなくなったら…それはもう大混乱です」。だからこそ通信士の福島は、いつでも陸上とつながっている。情報とは、生活の中にあって当たり前“安心材料”なのだ福島はいう。「それは、陸上でも船でも同じこと。ましてこのにっぽん丸は単なる移動の手段ではなく、お客さまの生活の場でもあるわけですから…。感謝の言葉を頂戴するわけでもなく、ただひたすらに陸上との交信を続け、気象や新聞などの情報を収集し続ける福島の毎日。「完全な黒子ですね。しかし、私がお客さまにお届けしているものは情報だけではありません。言うなれば“見えない安心感”とでもいいでしょうか…。人知れず…とはまさにこのこと。にっぽん丸の『おもてなしの心』は、こんなところにもしっかりと根付いていた。

もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅

那智熊野クルーズ

横浜→新宮→横浜
2005年7月13日(水)～7月15日(金) **84,000円**

相馬野馬追と白山山地クルーズ

横浜→相馬→鯉ヶ沢→横浜
2005年7月23日(土)～7月28日(木) **276,000円**

夏休みワンナイトクルーズ **ゆったり日程**

横浜→(伊豆諸島周遊)→横浜(午前出発/午後帰港)
2005年8月25日(木)～8月26日(金) **44,000円**

NIPPON MARU



韓国クルーズ **関西発着**

大阪→釜山→神戸
2005年7月19日(火)～7月22日(金) **124,000円**

古都慶州の世界遺産と関門海峡花火・阿波踊りクルーズ

横浜→ウルサン→下関→小松島→横浜
2005年8月10日(水)～8月16日(火) **Cコース 132,000円**

2006年世界一周クルーズ

横浜・神戸発着(各101日間)19ヶ国24港
2006年4月6日(木)～7月16日(日) **2,900,000円**

そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームC1室を2名でご利用の場合の大人お一人様・国内クルーズは消費税込の旅行代金です。*各種のコースがございます。**熟年割引代金です。



商船三井客船

MOPASは商船三井客船の愛称です。 〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三井ビル5F

お問い合わせは、各クルーズ取扱旅行会社またはMOPASクルーズデスクへ。

クルーズデスクフリーダイヤル

☎0120-791-211

<http://www.mopas.co.jp>



旅も楽しめる合宿にしたい。



急に1週間の全国出張になった。



家族水入らずで楽しめるプランを。

ひとりひとりに、満点旅行。

ONE
to
ONE



女だって大手を振ってひとり旅したい。



思い出に残る卒業旅行にしたい。



修学旅行は自分たちで決めたい。



結婚式から新婚旅行までオリジナルで。



北から南まで温泉三昧したい。

商品力、サービス力、情報力、3つのパワーで、
あなたの旅をさらに快適に。

旅にはさまざまな目的とカタチがあります。どんな旅でも、東急観光はすべてのお客様から満足され、喜んでいただきたいと願っています。そのために、オリジナル旅行や団体旅行など、ニーズに合わせた商品を多彩にご用意。またIT活用による最新情報の入手から24時間予約まで、リアルタイムな体制でお応えします。そして何よりも、旅の楽しさを熟知した私たちのひとりひとりが、お客様の旅を親身になって考え、最良のサービスをご提供します。

東急観光

国土交通大臣登録旅行業第38号
日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号
<http://www.tokyukanko.com>
<http://tour.tokyu.com>